



Title	緯書と古文學：左氏說を中心に
Author(s)	岩本, 憲司
Citation	中国研究集刊. 2010, 50, p. 16-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61034
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

緯書と古文學

— 左氏説を中心に —

岩 本 憲 司

はじめに

康有爲の奇想にはいつも感心させられる。今回は緯書と古文學の話である（注¹）。『新學僞經考』に

緯書雖多誕奇之說 然出西漢以前 與今文博士說合
猶無劉歆僞說也 其時與古說合者 則歆所竄入 大致
則與古文絕界分疆者也（中略）緯與讖異 漢書王莽傳
徵通圖讖者 是讖乃歆莽之學〔隋書經籍志糾謬第十

一）

とあるのがそれで、確かに、緯書の出現を西漢以前と認定したり、緯と讖とを截然と區別したりして（注²）、論全體としては首をかしげざるを得ないのだが、感心させられると言ったのは、緯書の中には古文説と合致する

ものがある”という點に目をつけたことについてである。なぜ感心するのか。それは、筆者が、緯書を今文學の專賣特許とする通説（注³）に、やや疑問を持っているからである。つまり、緯書は古文學とも繋がりのあるのではないか”というのが、筆者の問題意識なのである。なお、このような問題意識にヒントを与えてくれるのは、なにも康有爲だけではない。日本にも、疑古の大家福井重雅氏がいる。福井氏は、『漢代儒教の史的研究』の中で、「班固は①『左傳』と②緯書を論據として、③漢堯後説と④漢火德説を唱え、それにもとづいて『漢書』を選述し（注⁴、②と③の先驅者である⑤董仲舒を宣揚した（注⁵）」と言っている。このうち、⑤董仲舒には後の方で登場してもらうことにして、①④を考えてみると、①③④という系

列の親近性、及び②③④という系列の親近性は明らかである^(注5)から、兩者を勘案して、①左傳と②緯書との親近性というものが浮かび上がってくるのである^(注7)。ただし、筆者が言う「緯書と左氏傳との繋がりが」とは、例えば、穀梁の范甯序に

左氏豔而富 其失也巫(疏 多敘鬼神之事 預言禍福之期)

とあるような、説話の中身のこと、ではなくて、あくまで學說そのもののことである^(注8)。

さてそれでは、筆者が「緯書は古文學說(特に左氏說)と関わりがある」と考える根據は何か。それは實は簡単な話であつて、(一)緯書の隅隅にまで行き渡っている基本的な思考は、五行相生による漢火德說であり、(二)漢火德說は劉向父子に始まるものであり、(三)劉向父子に始まるのは左氏說である^(注9)、からである。なお、顧頡剛が『秦漢的方士與儒生』の中で、「識緯書の出現には三つの使命があつた」として、

其二 是發揮王莽劉歆們所倡導的新古史和新祀典的學說 使得它益發有證有據(一一九頁)

と言っているのは、「左氏」の語こそないが、この邊の事情を述べているものと解せられる^(注10)。

ということで大枠の提示が済んだので、以下、具體的

中身の検討に入る。第一は、緯書と古文家(左氏家)との關係である。

第一 緯書と古文家

通説は、今文家は緯書に親近し、古文家は緯書に反對した、ということであるから、ここで注目すべきは、緯書に反對した今文家と緯書に親近した古文家の存在である。

〔劉向父子〕

五行相生による漢火德說を通じての、緯書とこの二人との密接な關係は、既に述べたところであるが、その他にも、この二人が緯書に親近したことを示す資料は多い^(注11)。ただし、二人が緯書に反對したことを示す資料も、ないことはない。劉向について

初 成帝時 齊人甘忠可詐造天官曆包元太平經十二卷 以言漢家逢天地之大終 當更受命於天 天帝使真人赤精子 下敎我此道 忠可以教重平夏賀良容丘丁廣世東郡郭昌等 中壘校尉劉向奏忠可假鬼神罔上惑衆 下獄治服 未斷病死(『漢書』眭兩夏侯京翼李傳)

とあり、劉歆について
哀帝初立 司隸校尉解光亦以明經通災異得幸 白賀良

等所挾忠可書 事下奉車都尉劉歆 歆以爲不合五經
不可施行（同上）

とあるのがそれである。しかしながら、後者は孤立した例であるし、前者は注⁽¹¹⁾に挙げた同傳贊の文章^(a)と矛盾する。なお、『後漢書』張衡傳に

若夏侯勝眭孟之徒 以道術立名 其所述著 無識一言
劉向父子領校祕書 閎定九流 亦無識錄 成哀之後
乃始聞之

とあるのは、『漢書』藝文志に緯書が著録されていないこととの説明、つまり、緯書の成立時期の説明にしかなるまい^(注12)。ということ、劉向はさておき、劉歆を緯書に親近した古文家と認定してもよいであろう。

〔賈逵と李育〕

賈逵が緯書に親近した古文家（左氏家）であることは、『後漢書』の本傳に

臣以永平中上言左氏與圖讖合者（中略）至光武皇帝
奮獨見之明 興立左氏穀梁 會二家先師^(注13)不曉圖讖
故令中道而廢（中略）又五經家皆無以證圖讖明劉氏
爲堯後者 而左氏獨有明文 五經家皆言顓頊代黃帝
而堯不得爲火德 左氏以爲少昊代黃帝 卽圖讖所謂帝
宣也 如令堯不得爲火 則漢不得爲赤 其所發明補益
實多

とあることによって明白であるが、實はこの文は更に重要な問題を提示している。それは、緯書と古文家（左氏家）との親近性は、原理的なものであって、便宜ではない、ということである。つまり、先に注⁽⁹⁾で述べた、緯書の中核である五行相生による漢火德説（漢堯後説を含む）は、左氏傳に絡ませないとうまく説明できない、という、緯書と左氏傳との深い關係性の問題であり、賈逵はこのことを見抜いていたのである。だから、

桓譚以不善識流亡^(注14) 鄭興以遜辭僅免^(注15) 賈逵能
附會文致 最差貴顯（『後漢書』賈逵傳論）

とか、

鄭興賈逵以附同稱顯 桓譚尹敏^(注16)以乖忤淪敗（『後漢書』方術傳）

といったような評價は、皮相なものと言わざるを得ない^(注17)。

一方、李育については、『後漢書』儒林傳に
嘗讀左氏傳 雖樂文采 然謂不得聖人深意 以爲前世
陳元范升之徒更相非折 而多引圖讖^(注18) 不據理體
於是作難左氏義四十一事

とあって、彼が緯書に反對した今文家（公羊家）であることがわかる。そして、彼のようなねじれた存在の確認は、緯書に親近した古文家の存在を、つまり、緯書は今

文家の專賣特許ではない”ということを、裏から保證するものと言える。

以上、緯書と古文家との關係を考察した(注¹⁹)結果、“緯書の中に古文説(左氏説)があつてもおかしくない”という状況がある、ということは確認できたと思うが、實際にはどうなのか。膨大な緯書資料(注²⁰)の中から探し出さなければならぬ(注²¹)。

第二 緯書の中の古文説

①「火者陽之精也 人火爲火 天火爲災」(『春秋考異郵』宣公十六年の左氏傳文に「凡火 人火曰火 天火曰災」とあるから、左氏説にまちがいない。ただし、この文は、『古微書』に拾われているだけであり、周知のとおり『古微書』には出典が示されていないから、本當に緯書の文なのかどうか、確認することが出来ない。しかも、『續漢書』五行志二の注に引く(『春秋考異郵』)には「火者陽之精也 人合天氣五行陰陽 極陰反陽 極陽生陰 故應人行以災不祥 在所以感之 萌應轉旋 從逆殊心也」とあつて、後半の文章が全く違つてゐる。したがつて、この文は、緯書と認定するには疑問が残るもの、と言わざるを得ない(注²²)。

②「古之火正 或食于心 或食于味 以出内火 故味爲鶉火 心爲大火」(『詩含神霧』)

この文は、襄公九年の左氏傳文とほぼ同じであるから、左氏説にまちがいない。ただし、この文が拾われている『說郛(注²³)』には、先の『古微書』と同様に、出典が示されていないから、果して緯書の文なのかどうか、上の①例と同じ疑問が残る。

③「分爲四部 各有義焉」(『禮記』月令疏引(考異郵)説)

これを左氏説というには説明がいる。まず、同疏のすぐ上の文に「鄭釋廢疾云 春秋凡書二十四旱」とあるから、これが『春秋』の「旱」の記事に關するものであることがわかる。そして、疏の文を更にさかのぼると、次のような長い解説が見える。

按春秋桓五年秋大雩 傳云 書不時(中略)僖十一年秋八月大雩 十三年秋九月大雩 成公三年秋大雩 七年冬大雩 襄五年秋大雩 傳曰 旱 八年九月大雩 傳曰 旱 十六年秋大雩 十七年秋九月大雩 二十八年秋八月大雩 傳曰 旱 昭三年秋八月大雩 傳曰 旱 六年九月大雩 傳曰 旱 八年秋大雩 十六年秋九月大雩 傳曰 旱 二十四年秋八月大雩 傳曰 旱 二十五年秋七月上辛大雩 季辛又雩 傳曰 秋書再

雩 旱甚 定元年秋九月大雩 七年秋大雩 九月大雩

十二年秋大雩 僖二十一年夏大旱 宣七年秋大旱

莊三十一年冬不雨 僖二年冬十月不雨 三年正月不雨

夏四月不雨 六月雨 傳曰 自十月不雨至于五月

不曰旱 不爲災 文二年自十有二月不雨至于秋七月

十年云 自正月不雨至于秋七月 十三年云 自正月不

雨至于秋七月 是春秋之中 不雨有七 大旱有二 大

雩有二十一 都并有三十(中略) 三十之中 去此六事

不數 唯有二十四在 就二十四之中 分爲四部 桓五

年秋大雩 說雩禮 是一部也 僖二年冬十月不雨 僖

三年正月不雨 夏四月不雨 說禱禮 是二部也 文二

年文十年文十三年皆云 正月不雨至于秋七月 說旱而

不爲災 是三部也 此三部摠有七條 於二十四去七條

餘有十七條 說旱氣所由

もし、この解説が、疏の獨創ではなく、何らかの傳承によるものだとするれば(注24)、ここの「分爲四部 各有義焉」という緯書の文は、左氏説と認定してもよいであろう。

なぜなら、この長文の解説の中に何回も出てくる「傳曰」は全て左氏傳文だからである。

④「襄公大辱 師敗於泓 徒信不知權譎之謀 不足以交

鄰國定遠疆也」(『詩』大雅大明疏引(考異郵))

この文が、左氏説、いな反公羊説であることは、贅言を

要しないであろう。ちなみに、同疏によれば、この文は、

鄭玄が『箴左氏膏肓』の中で引用したものである(注25)。

⑤「左丘明爲素臣」(『論語摘輔象』)

この文は、左丘明が出ているから、左氏説にまちがいない。ただし、この文を拾っているのは、例によって、出

典を示さない『古微書』である(注26)から、緯書の文である確信は持てない。ちなみに、類似の文が「丘明爲素臣」

として、杜預の(春秋序)に見え、その疏には「其言丘明爲素臣 未知誰所說也」とある(注27)。

⑥「三年一閏 不告朔 非禮也 閏以正時 時以作事

事以厚生民之道 檢樞在是矣」(『北堂書鈔』歲時部引

(春秋元命包))

この文については、『禮記』玉藻疏に引く許慎『五經異義』

に

公羊説 毎月告朔朝廟 至于閏月不以朝者 閏月 殘

聚餘分之月 無政 故不以朝 經書閏月猶朝廟 譏之

左氏説 閏以正時 時以作事 事以厚生 生民之道

於是乎在 不告閏朔 棄時政也 許君謹按 從左氏

説 不顯朝廟告朔之異 謂朝廟而因告朔

とあるから、一應、左氏説と認定できる(注28)。

⑦「麟生於火 游於中土 軒轅大角之獸」(『公羊』哀公

十四年「麟者仁獸也」疏引(春秋説))

この文を理解するためには、公羊・穀梁・左氏の三家の所謂「獲麟」解釋（注29）を一とおり見渡ししておかなければならないが、それには恰好の資料がある。非常に長いが、煩をいとわず、先にあげておくことにする。

異義說左氏者 以昭二十九年傳云 水官不脩 故龍不至 以水生木 故爲脩母致子之說 故服虔注獲麟云 麟 中央土獸 土爲信 信 禮之子 脩其母致其子 視明禮脩而麟至 思睿信立而白虎擾 言從父成而神龜在沼 聽聰知正則名川出龍 貌恭性仁則鳳皇來儀 又毛詩傳云 麟信而應禮 又云 騶虞 義獸 有至信之德則應之 皆爲以脩母致子之義也 若鄭康成之說則異於此 脩當方之事則當方之物來應 故異義公羊說 哀十四年獲麟 此受命之瑞 周亡失天下之異 左氏說麟是中央軒轅大角獸 孔子脩春秋者 禮脩以致其子 故麟來爲孔子瑞 陳欽說 麟 西方毛蟲 孔子作春秋 有立言 西方兌 兌爲口 故麟來 許愼謹按 公議郎尹更始待詔劉更生等議石渠以爲 吉凶不並 瑞災不兼 今麟爲周亡天下之異 則不得爲瑞 以應孔子至玄之聞也 洪範五事 二曰言 言作從 從作父 父治也 言於五行屬金 孔子時 周道衰亡 已有聖德 無所施用 作春秋以見志 其言可從 以爲天下法 故應以金獸性仁之瑞 賤者獲之 則知將有庶人受命而行

之 受命之徵已見 則於周將亡 事勢然也 興者爲瑞 亡者爲災 其道則然 何吉凶不並瑞災不兼之有乎 如此 脩母致子 不若立言之說密也（中略）異義公羊說 麟 木精 左氏說 麟 中央軒轅大角之獸 陳欽說 麟是西方毛蟲（『禮記』禮運疏（注30））

まず注目すべきは、「獲麟」と《春秋》制作との時間的後関係である。董仲舒以來の公羊家が「獲麟」↓《春秋》制作としているのは周知のことだが、この文によつて、穀梁家（尹更始・劉向（注31）・左氏家は、逆に、《春秋》制作↓「獲麟」と順序づけていることがわかる。それから、公羊では麟を木精としているのに對して、左氏では土精または金精としていることがわかる。公羊の木精説は、「獲麟」↓《春秋》制作という順序と連動していて、《春秋》は漢つまり火徳であるから、五行相生で、木↓火ということになるのであるが、左氏の土精説・金精説は、これとはだいぶ趣を異にしている。左氏の方も、ベースは五行相生であるが、それがそのまま《春秋》制作↓「獲麟」という順序と連動しているわけではない。金精説（陳欽・鄭玄）の方は、金↓金だからもちろんだが（これを「脩當方致當方」説と呼ぶ）、土精説（賈逵・服虔・顔容）の方も、火↓土となつて、順序は逆だが、《春秋》が火に當たっているから、公羊と同じようにも見え

るが、實は「脩母致子」という特殊な説に據っているのである^(注32)。

ひるがえって、當該の緯書の文を見れば、これが、左氏説のひとつである「脩母致子」説の一部分であることは、明白であらう^(注33)。

⑧「古者以五靈配五方 龍木也 鳳火也 麟土也 白虎金也 神龜水也 其五行之序 則木蒸生火 火炔生土 土抔生金 金漻生水 水液生木 五者 脩其母則致其子 水官脩龍至 木官脩鳳至 火官脩麟至 土官脩白虎至 金官脩神龜至 故曰 視明禮脩 麒麟來遊 思睿信立 白虎馴擾 言從父成 而神龜在沼 聽聰知正 而名川出龍 貌恭體仁 鳳凰鳴桐」(『禮稽命徵』)

この文は、明らかに「脩母致子」説であり、上の⑦に引いた長文の資料にも、同様の記述が見られるが、より近い表現として、『左氏』昭公二十九年の疏に

漢氏先儒說左氏者皆以爲 五靈配五方 龍屬木 鳳屬火 麟爲土 白虎屬金 神龜屬水 其五行之次 木生火 火生土 土生金 金生水 水生木 五者 脩其母則致其子 水官脩則龍至 木官脩則鳳至 火官脩則麟至 土官脩則白虎至 金官脩則神龜至 故爲其說云 視明禮脩而麟至 思睿信立而白虎擾 言從父成而神龜在沼 聽聰知正而名川出龍 貌恭體仁則鳳皇來儀

とある。したがって、左氏説にまちがいないのだが、果して、本當に緯書の文であるかどうか、疑問が残る。というのも、この文を拾っている『古微書』・『玉函山房輯佚書』には出典がなく、『黃氏逸書考』には「同上」とあるが、その「上」が何を指しているのかよくわからず、『重修緯書集成』にはただ「清河郡本^(注34)」とあるだけだからである。疑問と言えば、この文が、すぐ上に挙げた左氏疏の文とあまりにもよく似ている點も、氣になるところである。

⑨「強幹弱流 天之道(宋均注 流猶枝也)」(『文選』班固〈西都賦〉注引〈春秋漢含孳〉)

この文は、『後漢書』賈逵傳に「今左氏崇君父 卑臣子 彊幹弱枝 勸善戒惡 至明至切 至直至順」とあり、同袁紹傳に「幕府惟強幹弱枝之義 且不登畔人之黨^(注35)」とあり、同盧植傳に「尋春秋之義 王后無嗣 擇立親長 年均以德 德均則決之卜筮^(注36)」(中略) 彊幹弱枝之道也」とあることからすれば、左氏説の可能性がある。また、『後漢書』班固傳及び『文選』西都賦に「蓋以彊幹弱枝 隆上都而觀萬國」とあるのも傍證になろう^(注37)。ただし、『白虎通』誅伐にも「所以尊君卑臣 強幹弱枝 明善善惡惡之義也」とあり、『後漢書』光武帝紀上にも「強幹弱枝 所以爲治也^(注38)」とあって、これらによれば、

公羊説の可能性もある。しかも、『史記』漢興以來諸侯王年表序にも「彊本幹弱枝葉之勢 尊卑明而萬事各得其所矣^(注39)」とあり、同劉敬傳にも「此彊本弱末之術也」とあることからすれば、單なる古語かも知れない。ということ、この文は、今までの例とは逆に、緯書であることはまちがいないが、左氏説とするには疑問が残る^(注40)。

⑩「大星如虹 下流華渚 女節意感 生白帝朱宣^(宋均注 朱宣 少昊氏也)」(『後漢書』賈逵傳注引《河圖》)

この注の對象となつてゐる賈逵傳の本文は「左氏以爲少昊代黃帝 卽圖識所謂帝宣也」であるから、《河圖》の「朱宣」では、ぴつたりとは一致しない。一致するのは實は次の文である。

炎帝號曰大庭氏 傳八世合五百二十歲 黃帝一曰帝軒轅 傳十世二千五百二十歲 次曰帝宣 曰少昊 一曰金天氏 則窮桑氏 傳八世五百歲 次曰顓頊 則高陽氏 傳二十世三百五十歲 次是帝嚳 卽高辛氏 傳十世四百歲(『禮記』祭法疏引《春秋命曆序》)

この文自體は、劉歆の《世經》(『漢書』律曆志下)と同内容で、五行相生による漢火德説の一環であるから、注(21)で述べたように、あらためて検討する必要のないものであるが、この文と賈逵傳の本文と《河圖》の宋均注を並

べてみると、帝宣＝少昊＝朱宣という線が浮かび上つてくる^(注42)。そうなれば、この《河圖》の文を左氏説と認定しても差し支えないであろう^(注43)。

まだ他にもあるだろうが、以上の十例^(注44)が、一應現時點で筆者が見つけ出している、古文説(左氏説)の可能性のある緯書の文である。ただし、このうち半数は疑問が残るものであるから、確實なものは、わずかに四、五例ということになる。

おわりに

さて、第一章で、緯書の中に古文説(左氏説)があつてもおかしくない」という當時の状況を確認し、その上で、第二章に於いて具體例を検討してみたわけだが、結果として見出されたのは、ほんの微微たるものであつた。この結果をどう評價するのか。通説の側からすれば、これらはたまたま紛れ込んだものということになるのであろうが、そうなると、先に述べたような、緯書の隅隅にまで行き渡つてゐる漢火德説の由來をどう説明するのか。この説が左氏説でないとする、といった何説なのか^(注45)。筆者には、今のところ、他にいいアイデアが浮かばない。つまり、筆者は、これら少数例を、いわば氷山

の一角^(注46)としてとらえ、緯書の中に古文説(左氏説)が見えるのは、あくまで原理的問題であつて、偶然ではない、と主張したのである^(注47)。表現を變えれば、具體例の検討後もやはり、緯書の中に古文説(左氏説)があつてもおかしくない”と言いたいのである。

なお、筆者は、舊稿^(注48)で、『春秋繁露』俞序篇に

孔子曰(中略)以爲見之空言、不如行事博深切明とあり、『史記』太史公自序に

子曰 我欲載之空言、不如見之於行事之深切著明也とあるのを、後者の(素隱)に

孔子之言見春秋緯

とあるのを手がかりに検討し、兩者の前漢末あたりの晩出性を證明した。それはつまり、「空言」は公羊を、「行事」は左氏をそれぞれ指し、この文は、公羊に對する左氏の優越性を、孔子の口を假りて言わしめていて、要するに、左氏の宣傳文句である、ということであつた。ただし、その際、「公羊學」と密接な關係にあると思われる緯書の中に、『左傳』の宣傳文句が見えるというのは、少しく奇妙なことである^(注49)として、自ら疑問を提出しておいた^(注50)。だから、先程の緯書の中に古文説(左氏説)があつてもおかしくない”という結論は、上の自問に對する自答の第一歩である^(注51)。

注

(1) 康有爲の緯書觀全般については、原田正己「清末思想家の緯書觀——康有爲『新學偽經考』を中心として——」(『緯思想の綜合的研究』所収)を参照。

(2) 緯と識とは渾然として一體をなしていると考えられる。本稿ではこれを「緯書」と呼ぶ。

(3) 枚舉に暇がない。ここでは代表例をいくつか挙げる。「予は公羊學者が緯書を作つたと斷言する丈の材料を有せぬ。併し(中略)公羊學と圖識とは、同一物といふ事は出來ぬとしても、前者が後者を利用したといつても差支へないかも知れぬと思ふ」(狩野直喜『兩漢學術考』一五二頁)。「その佚文によつて考えると、識緯の説は公羊を中心とする齊學から出ていることが判る」(武内義雄『中國思想史』一三九頁)。「私は緯書思想に公羊思想、特に董仲舒などの思想が大きく影響していると考える」(安居香山「緯書の基礎的研究」思想篇六五頁)。「これ等によつても公羊家説が緯說の中に吸収される過程を想見することが出来る。吸収されるというよりも、公羊家がかかる緯說をつくり出したと言つた方が適切かも知れない」(山田琢「春秋學の研究」二六頁)。「今文學は内容的に圖識との親縁性が濃厚な學問であ

った」(堀池信夫『漢魏思想史研究』二五五頁)。

(4) 第三篇第二章「班固の思想 下」四四九頁。なお、番號は筆者が振った。

(5) 本文ではなく、筆者が論旨を要約したもの。

(6) すぐ下で述べる。

(7) だから、通説の側から疑問が出るのは當然であり、例えば、渡邊義浩氏は「左傳と緯書の心酔者である班固が、左傳家ではなく公羊家の董仲舒をなぜ宣揚するか」(『兩漢の儒教と政治權力』一九七頁)と言っている(ちなみに、筆者ならば、「左傳と緯書とは對立するものではないか」と問う)。なお、福井氏は、これに對して、「誰か過去の先達や、先輩を搜して、權威を置こうとした時に、左傳家には誰もいなかったから」(同書二〇四頁)と答えている(ちなみに、筆者ならば、「緯書と董仲舒との深い繋がりから」と答える)。

(8) 福井氏が「古來、『左傳』と讖緯に關しては、その相關性や類似性について指摘されることが少なくない」(『漢代儒教の史的研究』四二九頁)といっているのは、その自注による限り、殘念ながら、説話の中身のことである。

(9) 周知のとおり、それまでは、五行相勝による漢水德說か漢土德說であつた。なお、劉歆はともかく、劉向の方は公羊寄りであつたはずである、という異論も豫想されるが、後に賈逵のところでも觸れるように、漢火德說(漢堯後說

を含む)はもともと、左氏傳に絡ませないとうまく説明できない性格のものである。ちなみに、筆者は、『左氏傳』を、劉向父子が、中祕書を領校した際に發見した戰國時代の史話・説話集にもとづいて編集したもの、と考えている(拙稿「義から事へ——『左氏傳』の出現」『兩漢における詩と三傳』所収)。

(10) ちなみに、数少ない緯書の専家の一人、安居香山氏の考え方は、上の注(3)にも示したように、通説どおりだが、一部に、トーンの違つた言説が見られる。それは、「緯書思想そのものは、當時の思想の集成的な構成の上に形成されている故に、特に或る特定の體系を考える事は難しい面がある」という事である。(中略)そこに諸種の思想が混在している。ただそれを緯書なりに組織立てたところに、緯書思想の體系があると考え。故に、古文學思想が混在する事も、充分あり得るのである」(『緯書の基礎的研究』六七頁)といった調子である。緯書と符命(王莽)とを引き離そうとするあまり、つい筆がすべつたものと解釋したいが、きわめて複雑な事象を「混在」の一言で片づけるのでは、思考停止と言われても仕方あるまい。

(11) ④「漢興推陰陽言災異者 孝武時董仲舒夏侯始昌 昭宣則眭孟夏侯勝 元成則京房翼奉劉向谷永 哀平則李尋田終術」『漢書』眭兩夏侯京翼李傳贊

⑥「初 歆以建平元年改名秀 字穎叔云（注 應劭曰 河圖赤伏符云 劉秀發兵捕不道 四夷雲集龍鬬野 四七之際火爲主 故改名 幾以趣也）」（『漢書』劉歆傳）

⑦「衛將軍王涉素養道士西門君惠 君惠好天文讖記 爲涉言 星孛掃宮室 劉氏當復興 國師公姓名是也 涉信其言（中略）歆因爲言天文人事 東方必成」（『漢書』王莽傳下）

⑧「漢承堯運 歷數延長 今皇帝姓號見於圖書 自前世博物道術之士谷子雲夏賀良等 建明漢有再受命之符 言之久矣 故劉子駿改易名字 冀應其占 及莽末 道士西門君惠言劉秀當爲天子 遂謀立子駿 事覺被殺」（『後漢書』竇融傳）

⑨「其後劉歆研機極深 驗之春秋 參以易道 以河圖帝覽 嬉雉書乾曜度推廣九道 百七十一歲進退六十三分 百四十四歲一超次 與天相應 少有闕謬」（『續漢書』律曆志中）

なお、これは劉歆本人のことではないので、あくまで傍證だが、『後漢書』李通傳に「初事劉歆 好星歷讖記 爲王莽宗卿師」とある。また、周知のことだが、『漢書』五行志は、劉向の「洪範五行傳論」にもとづき、劉歆の災異解釋も多數載せられている、ということにも注目すべきであろう。

(12) 少なくとも、祕書の領校時には緯書はまだなかった、ということ。

(13) 板野長八『儒教成立史の研究』が、劉向と劉歆にあてて

いる（三二七頁）のは、時代的に言って誤り。穀梁は不明だが、左氏はおそらく韓歆であろう（『後漢書』范升傳を參照）。陳元だとすると、下にあげる『後漢書』儒林傳と矛盾する。

(14) 「其後有詔會議靈臺所處 帝謂譚曰 吾欲以讖決之 何如 譚默然良久 曰 臣不讀讖 帝問其故 譚復極言讖之非經 帝大怒曰 桓譚非聖無法 將下斬之 譚叩頭流血 良久乃得解 出爲六安郡丞 意忽忽不樂 道病卒 時年七十餘」（『後漢書』桓譚傳）

(15) 「帝嘗問興郊祀事 曰 吾欲以讖斷之 何如 興對曰 臣不爲讖 帝怒曰 卿之不爲讖 非之邪 興惶恐曰 臣於書有所未學 而無所非也 帝意乃解 興數言政事 依經守義 文章溫雅 然以不善讖故不能任」（『後漢書』鄭興傳）

(16) 「帝以敏博通經記 令校圖讖 使謁去崔發所爲王莽著錄次比 敏對曰 讖書非聖人所作 其中多近鄙別字 頗類世俗之辭 恐疑誤後生 帝不納 敏因其闕文增之曰 君無口爲漢輔 帝見而怪之 召敏問其故 敏對曰 臣見前人增損圖書 敢不自量 竊幸萬一 帝深非之 雖竟不罪 而亦以此沈滯」（『後漢書』儒林傳）

(17) このような評價は、今に至るまで引き繼がれている。氣づいたものだけでも列挙すれば、

○「古文學在學統上本與緯讖立於相反的地位 但漢代古文

學者 因爲或阿俗學 或投主好 或別具深心 所以也多與
緯識有關」(『周予同經學史論著選集』(緯書與經今古文學)
五八頁)

○「元來、劉歆及び其の後の左傳家は、圖識の説を好まな
かつたもので、鄭興父子の如きは此の故に重用せられず、
左傳の表章に功を奏することが少なかったのである。然る
に賈逵は此の點に着目して時の好尚に乘ずる作戰に出で、
以て左氏の表章を圖つたのである」(鎌田正『左傳の成立と
其の展開』四七七頁)

○「古文學説に識緯も取り込みうる態度、今文經説をも援
用するのと同じのその柔軟な姿勢こそが、時代に評價され
たものと推測される」(田中麻紗巳『兩漢思想の研究』一四
八頁)

○「古文學の發展にとって有効であるならば、圖識を利用
してもかまわぬ、という柔軟な様相をもつものであった。
いわば官僚の處世法の融通性ととてもよいかもしれない」

(堀池信夫『漢魏思想史研究』二五七頁)

なお、これらの論考の背後には、もちろん、先に述べた、緯
書を今文學の專賣特許とする、通説がある。

(18) ここの文を「從來二家の争は圖識を引いた、委しく言へ
ば公羊には圖識あり、左傳にはない、といふ事で議論をし
た」(狩野直喜『兩漢學術考』一四五頁)と解するのは誤り。

「二家のいづれもが圖識を引いた」ということである。し
たがって、この文から、陳元もまた、緯書に親近した古文
家の一人である、ということがわかる。

(19) 鄭玄は、今古兼習だから、最初から考察の対象にはなら
ない。

(20) 重複が多いから、見かけほどではないが、やはり膨大で
ある。

(21) 五行相生による漢火德説については、先に述べたように、
緯書の基本的思考であるため、あまりにも例が多いので、
既に探し出したものとして、ここでは除外する。

(22) なお、緯書に傳文がそのまま登場すること自體は、公羊
にもいくつか見られ、異とするに足らない。例えば、「王者
執謂 謂文王也」(『公羊』隱公元年疏引(春秋說)は、隱
公元年の公羊傳文そのままであり、「王者之後稱公 大國稱
侯」(『禮記』王制疏引(援神契)は、隱公五年の公羊傳文
とほぼ同じである。

(23) 他の輯佚書にも拾われているが、いづれもみな、ここか
らの孫引きである。

(24) なお、馬國翰は『玉函山房輯佚書』で、この長文をうま
くアレンジして、(考異郵)の文として拾っているが、そこ
までするのは無理がある。

(25) 「僖二十二年宋公及楚人戰于泓 左氏以其不用子魚之計至

於軍敗身傷 所以責襄公也 而公羊善之云 雖文王之戰亦不是過 鄭箴膏肓云 刺襄公不度德不量力 引考異郵云 襄公大辱 師敗於泓 徒信不知權譎之謀 不足以交鄰國定遠疆也 此是譏師敗也 公羊不譏 違考異郵矣

(26) 注(23)に同じ。

(27) なお、傳述人の名が緯書に登場してくること自體は、異とするに足らない。例えば、「公羊全孔經(宋均注 公羊公羊高也 經指謂春秋)」(『初學記』卷二十一引(春秋演孔圖))、「傳我書者 公羊高也」(『公羊』何休序疏引(說題辭))、「董仲舒亂我書」(『論衡』案書引(讖書))など。

(28) なお、文公六年の左氏傳文に「閏月不告朔 非禮也 閏以正時 時以作事 事以厚生 生民之道 於是乎在矣 不告閏朔 棄時政也 何以爲民」とある。ただし、『北堂書鈔』歲時部のこの邊は竄誤が多いようなので、これが本當に(元命包)の文なのか、やや疑問が残る。

(29) 「獲麟」解釋全般については、間嶋潤一「兩漢に於ける「獲麟」解釋に就いて」(『漢文學會會報』36)を参照。

(30) なお、『左氏』哀公十四年「西狩獲麟」の疏にも、このダイジェスト版のような形で、同旨の文がみえる。ただ、こことは異なる表現もあるので、その部分のみ、補足として挙げておく。

「賈逵服虔穎容等皆以爲 孔子自衛反魯 考正禮樂 脩春

秋 約以周禮 三年文成致麟 麟感而至 取龍爲水物 故以爲脩母致子之應」

(31) なお、間嶋氏は、注(29)に挙げた論考に於いて、「夫子行說七十諸侯 無定處 意欲使天下之民各得其所 而道不行 退而脩春秋 采毫毛之善 貶纖介之惡 人事浹 王道備 精和聖制 上通於天而麟至 此天之知夫子也」(『說苑』至公)という資料も引いている。

(32) 左氏ももちろん漢火德説であるが、ここで《春秋》が火に當たるのは、公羊のように春秋は漢だからではなく、本文で明らかのように、春秋は禮だからである。つまり、左氏は、「獲麟」と《春秋》制作との前後關係を、革命説とはかわりのないところで語っている、ということである。

(33) 先に挙げた長文の資料で充分にわかるが、よりびつたりする表現として、注(30)にその一部を挙げた左氏疏の文に「說左氏者云 麟生於火而遊於土 中央軒輶大角之獸」とある。

(34) 『黃氏逸書考』には、よく「清河郡本」が出てくるから、『重修緯書集成』は、おそらく、「上」を「清河郡本」と解釋したのであろう。ただし、この「清河郡本」は正體のわからない書物である。博雅の教示を請う。

(35) 襄公元年の左氏傳文に「且不登叛人也」とある。

(36) 昭公二十六年の左氏傳文に「昔先王之命曰 王后無適

則擇立長 年鈞以德 德鈞以卜」とある。

- (37) 『文選』の方の注に「左傳曰 魯諸大夫曰 禹會諸侯於塗山 執玉帛者萬國」とある。ちなみに、これは、哀公七年の傳文である。なお、『漢書』地理志下に「蓋亦以彊幹弱支 非獨爲奉山園也」とあるのも、この文とかかわりがありそうである。

- (38) これは、博士丁恭の議であり、『後漢書』儒林傳によれば、彼は公羊家である。

- (39) 崔適『史記探源』によれば、ここは褚先生の補缺部分である。

- (40) なお、『春秋繁露』盟會要に「故曰 立義以明尊卑之分 強幹弱枝以明大小之職」とあり、同十指に「強幹弱枝 大本小末 一指也」とあるように、「強幹弱枝」が「大小」がらみで語られると、話は複雑である。桓公二年の左氏傳文に「本大而末小」とあるからである。このような、緯書と左氏傳に繁露を加えた三角關係は下で述べる。

- (41) 『文選』卷第五十四（辯命論）の注に「春秋元命苞曰」として、ほぼ同文がみえる。

- (42) ちなみに、〈命麻序〉の「次日帝宣」の下「曰少昊」は「或は注記の文がまぎれこんだかとも思われる」という原田氏の指摘は、正鵠を得ている（注（1）に挙げた『識緯思想の綜合的研究』二九〇頁）。

- (43) 實は、文中に「白帝」とあるのだから（『元命苞』の方にはないが）、検討するまでもなく、〈命麻序〉の文と同様に、五行相生による漢火德説の一環であると、即座に認定してもよかつた。

- (44) 安居香山・中村璋八兩氏の編集による『重修緯書集成』卷二（書・中候）は、『尙書緯』として「天有五號 各因所宜稱之 尊而君之 則曰皇天 元氣廣大 則稱旻天 自上監下 則稱上天 據遠視之 蒼蒼然 則稱蒼天」（六八頁）という文を掲げ、出典として『周禮』大宗伯疏を挙げ、この文を拾っている輯佚書として、『緯攷』・『古微書』・『玉函山房輯佚書』・『漢學堂叢書』・『黃氏逸書考』・『集緯』を列挙している。ところが、『周禮』大宗伯疏の原文は「異義天號等六（？）今尙書歐陽說曰 欽若昊天 春日昊天 夏日蒼天 秋日旻天 冬日上天 摠爲皇天 爾雅亦然／故尙書說云 天有五號 各用所宜稱之 尊而君之 則曰皇天 元氣廣大 則稱旻天 仁覆愍下 則稱旻天 自上監下 則稱上天 據遠視之 蒼蒼然 則稱蒼天／謹案 尙書堯命羲和 欽若昊天 摠勅四時 知昊天不獨春 春秋左氏曰 夏四月己丑孔子卒 稱旻天不弔 時非秋天」である。兩者を比較するに、『緯攷』を底本とした『重修緯書集成』の方は、「元氣廣大」の下に「則稱昊天 仁覆愍下」の八字が脱落して、四號になってしまっているが、そのことはしばらく

措いて、より重要な問題がある。それは、疏の中の「故尙書說云」の「故」の讀みの問題である。諸諸の輯佚書が「天有五號」以下を緯書の文として拾っているのは、おそらく、「故」をゆえにと讀んでいるからであらう（單なる孫引きの場合もあるが）。そうすれば、「尙書說」が一まとまりの語となり、「尙書說」ならば、『禮記』檀弓下の疏に「凡鄭云說者 皆緯候也 時禁緯候 故轉緯爲說也。故鄭志張逸問禮注曰書說 書說何書也 荅曰 尙書緯也 當爲注時 時在文網中 嫌引祕書 故諸所牽圖讖 皆謂之說」とあるのに倣い、「尙書緯」と讀みかえられるからである。しかし、「ゆえに」では、上文と論理的につながらないのも、さることながら、何よりもまず、これは、許慎『五經異義』の文である、ということをお忘れてはならない。今文說と古文說とを掲げ、どちらかに軍配を上げる（だいたい古文說の方だが）という『異義』の體例を考え、上に「今尙書歐陽說」とあるのを確認すれば、下の「故尙書說」は正しくは「古尙書說」と讀むべきことは、自明であらう（ちなみに、『詩』王風〈黍離〉「悠悠蒼天 此何人哉」の毛傳に「蒼天以體言之 尊而君之 則稱昊天 元氣廣大 則稱昊天 仁覆閔下 則稱旻天 自升降鑒 則稱上天 據遠視之 蒼蒼然 則稱蒼天」とあり、疏に引く『異義』に「古尙書說與毛同」とある）。これを要するに、件の文は、『重修緯書

集成』をはじめとする諸諸の輯佚書の、いちいち出典の原文に当たつてその論理を詳しく分析しない杜撰さによつて、緯書でないものが緯書にされてしまった恰好の例である（『緯摭』はそれでも、ときどき考證を行なっている）。實は、筆者も、危うく、だまされて、この文を、緯書の中の古文說の例に加えてしまふところであつた。

(45) 「緯書みずからが、相生説を説いたとは、緯書の成り立ちや、その他の思想研究からしても考えられない。とするならば、當時流行の相生説を援用したと考える外無い」（安居香山『緯書の成立とその展開』四三一頁）と言うのでは、説明になるまい。安居氏自身も「漢火德を説くに當り、伏羲を木德に配し、以下諸王朝を配して相生的五德終始説を立説したのは、漢書の律曆志や郊祀志贊の資料が示すごとく、劉向父子であつた」（同書四三〇頁）と言っているではないか。

(46) 水面下の巨塊が、五行相生による漢火德である。

(47) もちろん、筆者は、禁壓などによつて散佚したものの多くは古文說であつた、などとロマンを語るつもりは毛頭ない。あくまで現存資料にもとづくのが學問というものである。ちなみに、現存する緯書資料は、一部のものを除いて、全くの断片であり、いくら継ぎ接ぎしても、まとまつた一つの文章にはならない。この點から、筆者は、緯書が當時、

まとまった一つの書物の形體をとっていたのかどうか、疑問を持っている。はじめから断片だったのではないだろうか。

- (48) 「漢代春秋學に關する二、三の問題——『春秋繁露』俞序篇と『史記』太史公自序——」(『跡見學園女子大學紀要』第十六號)

- (49) 同拙稿の注 (37)

- (50) 第五二回國際東方學者會議 東京會議 シンポジウムⅠ「兩漢における『春秋』三傳の相剋」(二〇〇七年五月一日)で、筆者が、「義から事へ——『左氏傳』の出現」と題して發表を行なった際、この「空言」と「行事」の話を出したところ、京都大學の池田秀三氏からも、同旨の質問を受けた。

- (51) 實は、問題はこれだけではない。上の自問の續きとして、筆者はさらに「また、この點で言えば、たとえ、その晩出性を考慮するにせよ、俞序篇・太史公自序といった、一應董仲舒に關係づけられている文章の中に、『左傳』の宣傳文句が見えるということも、奇妙と言えば奇妙である」と述べておいた。本稿の冒頭に掲げた福井氏の所謂①『左傳』②緯書③漢堯後說④漢火德說⑤董仲舒のうち、①と⑤との關係である。この問題に答えるのは、自答の第二步ということで、まだ準備はしていないが、展望だけは、以下に示

しておきたい(なお、實はここでは、董仲舒よりも、『春秋繁露』と言った方が正確である)。

『繁露』と緯書とに密接な關係があるのは、周知のことである。その際、普通には、『繁露』→緯書という影響關係が考えられるが、『繁露』が前漢末までの思想を含むとすると(筆者はそう考える)、緯書→『繁露』というケースも考えられる。そして、もし緯書に左氏説が入っているとすれば、『繁露』に左氏説があつても少しも不思議ではない、ということになる。そもそも、『左氏傳』・緯書・『繁露』の三者は、いづれもみな、前漢末というる、つぼのような時代に出現したものであり、同時代性をもった三者に相互關係がないわけではない、と筆者は考える。なお、『繁露』がこのような性格をもつとすれば、董仲舒は、もはや、單なる公羊學者ではなくなる。福井氏のいう「班固による董仲舒の虚像の造作」は、おそらく、この邊の事情と關わりがあるのだろうが、今、筆者が注目しているのは、何休が『公羊解詁』に於いて、董仲舒の説をかなり利用しながら、董仲舒という人物の存在を全く無視していること、『後漢書』儒林傳に董仲舒が登場しないこと、などである(兩書で持ち上げられているのは、胡毋生である)。なお、緯書(左氏説)→『繁露』の具體例としては、先の俞序篇の「孔子曰(中略)以爲見之空言 不如行事博深切明」の他に、重政篇の「故曰

博而明 深而切矣」などが考えられ得る。

補論 一

最後に『史記』太史公自序の文が出てきたところで、緯書の中の古文説の候補として、「失之豪釐 差以千里」を挙げておきたい。この文は、同じ太史公自序の中に「易曰」として見えるが、『集解』に「今易無此語 易緯有之」とあり、實際、いま『易緯通卦驗上』に見える（通行の「易緯八種」を信用しての話だが）。さて、この文が緯書であるとして、それを古文説（左氏説）と認定する根拠は何か。一つは、同じ太史公自序の中に、しかもごく近い箇所にも、「空言と行事」という、緯書であり、かつ左氏説である文が見える、からである。もう一つは、『禮記』經解の最後に「易曰 君子慎始 差若豪釐 繆以千里 此之謂也」として、同旨の文が見えるが、同篇の前の方にも「屬辭比事 春秋教也」という左氏説（拙稿「屬辭比事」とその背景）『日本中國學會報』第四十八集を参照）がある、からである。もちろん、いづれも状況證據に過ぎないから、斷言は出来ない。一つの可能性として挙げたまでである。ちなみに「失之豪釐 差以千里」「差若豪釐 繆以千里」等の表現は、『大戴禮』保傳・同禮察・『新書』胎教・『漢書』東方朔傳・同趙充國傳にも見えるが、いづれもみな、晩出の文獻である。

補論 二

本稿の校正中に、關口順氏より、「皮錫瑞『經學歷史』について」（埼玉大學紀要 敎養學部 第四五卷第一號 二〇〇九年）が届いた。刮目に價する高論で、拙稿を「緯書と古文學」と名づけたことを後悔させられた。というのも、「後漢において、例えば、左傳學者と公羊學者が學官の坐をめぐり争つたのは事實であるが、別に古文學說一般と今文學說一般が争つていたのではない」とか、『左氏傳』『公羊傳』『周禮』などの經説は、他の經説と同じくそれぞれが完結的に存在し、時として相互に對立することはあっても、古學の經説體系とか今學の經説體系とかは存在していなかったと考えられる」とか、「堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子・曾子・子思・孟子・周濂溪・・・朱熹と連なる道統が歴史事實としてではなく朱子學の一環としての意味を持つように、兩漢における今古文の對立という捉え方も歴史事實というより清末今文學の一環としての意味を持つ」とか、極めて適切な指摘が数多くなされている、からである。今からでは遅いが、せめて「緯書と左氏説」とすべきであった。叙述の仕方も、拙稿は、今文・古文の對立という圖式に従ってしまっているが、目差している方向は實は關口氏と一致している、と言ったら、氏は迷惑がるだろうか（?）。